
地味な青年の異世界転生記 閑話

鵜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地味な青年の異世界転生記 閑話

【Nコード】

N6474S

【作者名】

鵜

【あらすじ】

一人称で語られる物語の裏側のお話です。

一人一人が何を考えているのか、どんな風に生きているのか。他の人達に焦点をあてた話です。不定期更新で、思いつきと気分転換で書かれていくことになると思います。

書ききれなかったことを主に書いていく予定です。

閑話 1 ある日の薬師と悩める獵師

薬草の匂いが染み付いた部屋の中、俺は作業を行っていた。椅子に座り、足が動かない俺のために作業しやすいよう調整された机にすり鉢を置いて、適度に力を加えてハクベ……通称消毒草と呼ばれる草を擦り潰していく。

擦り潰した消毒草は乾燥させ、細かくして革の袋に詰めていく。実際に手当てをする時には、水を含ませて布に塗り怪我に当てるといった風に使われることになる。

応急処置用の薬として一般的な物であり、今の俺の生活における収入源の一つだ。

冒険者時代に治療費を削るために本を見ながら見様見真似で始めた薬の調合だが、本業になるとは昔は思ってもみなかった。足が悪くても出来ることを考えると……人生本当に何が役に立つか解らない。

きりの良い所まで作業を行い、薬を作る手を一度止めて休んでいると、どんだん！ と大きなノックが家中に響く。来客が来たようだ……この音はガイだろう。

「ジンさん。ガイさんです！」

背中で三つ編みに括った生命力に溢れた可愛らしい少女……エリ

ーがぱたと音を立てて部屋に走って入ってくる。俺は彼女に頷くと、部屋に連れてくるように頼んだ。そして苦笑いする……子供に頼らなければ友人一人出迎える事が難しい現状に。

ガイは自身で取った革と俺の作った薬を持ち、歩けば三日掛かる城塞都市カイルルまで売りに行ってくれていたのだ。

「よおつ！ ジン。帰ったぜ。薬も革もそれなりの値段で売れたぜ」
「それはありがたいな。助かる」

部屋に手を上げて入ってきた髭の大男は低い机を挟んで対面に座ると、にいつと笑って荷袋から一本の壺を取り出しガタつと机の上に置く。

「見ろ！ こいつはっ！」
「失礼します」

ガイが満面の笑顔で解説しようとした時、一時的に席を外していたエリーが水差しと小さな棒、コップを二つ、保存食のチーズを切ったものを部屋に運んできた。にっとエリーはガイに笑いかけると、奴は苦笑いして頭を掻いた。

「ありがとう。今日は外してもらえるか？」
「わかりましたっ！ また明後日きますねっ！」
「無理はしなくていい」

エリーは頭を下げると踊るように軽やかに部屋から出ていく。十歳くらいとは思えない聞き分けの良さだ。彼女は俺の話す事の真偽がわかるらしく、俺が本当に困る時にはごねることが無い。

「やれやれ、エリーちゃんは気が効くな。ありゃ、いい嫁さんになるぜ」

「早く相手を見つけて欲しいものだ」

俺のように終わった人間の元にいることはためにはならないだろう。俺とガイの師匠である彼女の母……マリアからは飽きるまで好きにさせてと言われているが何を考えているのか。昔から読めない人だ。

「お前さんがもらつちまえばいいじゃねえか」

「阿呆……で、そいつは、何の酒だ？」

げらげら笑うガイに注ぐように促す。とくとく……と杯に注がれると濃密な甘い匂いが漂ってきた。三分の一ほど杯を充たすと、今度は水差しから水を注ぎ掻き混ぜる。

「ワインか」

「南のグライダー産……らしい。いいもんだぜ」

「良く金が足りたな」

「ダンジョンに一日籠もったのさ。浅い階だけだがね」

ぐふふと笑う彼に苦笑で返す。恐らく土産を買ったために潜ったのだろう。昔からこいつはそうだった。金を自分のために使わず、酒代の他は仲間の装備や道具、俺の本の代金に自分の分のお金を充てていた。

こいつに言わせれば、代わりに強くなったり必要な知識を身に付けてくれるから楽でいいということだったが。

俺の足もガイがいなければ治療できず、切断しなければならなかっただろう。そのために掛かった金を考えると頭が上がらない。そんなガイは酒を煽ってうめえー！ とからから笑っていた。

「ふむ。確かにこいつは旨い」

「だろっ！ だろっ！ いやあ、いい買い物だぜ」

チーズをたまに摘みながら暫く二人で雑談を交えて飲んでいると、ふと、ガイの目線がたまに揺れていることに気付く。こいつの癖だ。俺は小さく笑った。

「で、何を悩んでいる？」

「うえっ！ な、何でわかった！」

ガイは摘んでいたチーズをぱろりと落として驚きながらこちらを見て苦笑する。

「ガイは分かり易いからな。顔にすぐに出ている。またクルスか？」
「クルスも心配だが……もっとやべえのがいる。ほれ、お前の恋人の弟だ」

「誰が恋人だ……ケイトか？」

珍しく難しい顔をしてガイは頷く。エリーの弟のケイト……彼の噂は俺もエリーや患者から聞いている。

天才、神童……そして、化物では……という畏怖も混じっている。四歳で猟に興味を持つという……異常な子供だ。しかもそれが現在まで二年も続いている。

「そうだ。あいつには不可解な所が多い」

「一番付き合いのあるのはお前だからな。どう思うんだ？」

「天才……というわけではないと思った。俺は頭悪いからお前みたいに上手くは言えんが……元から知ってる……って感じが。ああもう、わかんねえ」

がりがりとガイは頭を搔く。話を聞きながら俺もふむ……と、考える。俺はこいつ自身が思っているほど頭が悪いとは思ってはいない。

知識……という点では確かに足りないが、直感で物事の本質を把握していくタイプだ。人間関係では困っているところを見たことがない。そんなガイが悩んでいる……。

「後な……本人は目がいっていったんだが……」

「ふむ？」

「森の中の草むらにいる兎を、点でしか見えなくらい離れた場所から見つけるとかありえんだろ！ 目が良い？ んなわけあるかつ！」

どんつ！と叫びながら机を叩く。がしゃつと壺が撥ねて音をたてた。

「くつ……くく……いや、すまん。あはは……それで誤魔化されると思われてるのか？」

「流石に心外だが……わからないと言っておくしかないからな」

惘然としてガイはそっぽを向く。

まあ、こいつとしてはそうするしかないだろう。それでもちゃんと教えているということは、ケイトは中々見所はあるところか。

「しかし、ケイトには一度釘を刺して置くべきだろう。技術の方は真面目に学んでいるのか？」

「ああ、そっちはな。あいつほど真面目なやつは珍しい。ガキの癖に真剣そのものだ。生き物を殺す事に抵抗があるらしいが、無いよりはあったほうがいいだろう」

「まあ、そうだな」

俺は同意する。生き物を殺すのが趣味になったりしたら、本当に

質が悪い。そういう奴に力を与えてしまえば碌な事にならないのは目に見えている。

「問題はその、目が良いって……それだろうな」

「ああ。ひよっとしたら……『呪い付き』かもしれない……」

「滅多なことというな」

呪い付き……死と破滅を望む呪われた人間。大抵、何かを憎悪している狂いきった奴らだ。正気でない……そして、圧倒的な力を持つていたり、特殊な能力を持っていたりする人間。知恵を持った化物。その殆どが害を為す存在だ。

俺達の仲間を殺し、俺の足を奪った敵も……この狂った『呪い付き』だった。

「例えそうだとしても……殺せるか？」

「無理だ。師匠の息子だぞ……それに、情が移っちゃった」

「だとすれば……ケイトが狂わないようになんとかしてやるのが俺達の仕事だろう」

「俺『達』……ね」

くくつとガイが笑う。俺も声を出さずに口の端だけ動かして笑い、杯を相手に向けて掲げる。俺自身がどうするかは俺もケイトに会って直接判断すればいい。

「しかし、どうすりゃいいと思うっ？」

「まずは孤立させないようにすることだな……今のままではまずいだろう」

「だけだよ。あいつ子供で友達作ろうとしねえんだよ。違いすぎる」

ふむ……と、考える。同年代では難しいということか。エリーの話だと、可愛い弟といったイメージしか伝わらなかったが……友人に玩具にされたりとか、幸せそうにお菓子を食べるとか……。どうもガイの話がしつくり来ない。

そういえば友人の妹の世話もしっかりやっていたと言っていたな……む？

「……手が無いことはないな」

「どうすんだ？」

「クルスを任せてみよう」

「はあっ！んな無茶なっ！」

クルス……俺達の幼馴染であるバルドスの……俺達が助けられなかった親友の娘は、原因が解らない人間不振に陥っている。

子供達も頑張っているし、ガイも他の大人達も関わっているが……改善していない。

「ケイトの性格は……悪いかな？」

「いや……悪ガキっぽい所もあるが、師匠の躰がいいんじゃないかな？」

「それなら……俺も何とかなると思わないが……難しいだけに、あいつに出来ない事もあると他の者の心配を取り除けるだろう」

「あいつが……クルスを何とかしちまったら？」

困惑したように俺にガイが聞き返す。俺はワインの入った杯を煽り、笑いながら杯を持った手の人差し指をガイに向ける。

「嬉しいだけじゃないか。皆喜ぶ」

「……成程な」

ガイが笑って杯を置く。何時の間にかワインは全部飲んでしまっていたようだ。

少しの間ガイは考えるように黙っていたが、荷袋を担ぐと迷いは晴れたのか、立ち上がった時にはすっかりした顔に戻っていた。

「クルスに川へ行くように伝えてみる。聞いてくれるかはわからないが」

「そうか。では俺のところ来る理由は依頼だと伝えてくれ。あいつを計る」

「わかった……頼むぜ？」

「ああ。任せておけ」

ガイはにいつと笑うと、背中を向けたまま手を上げて帰っていった。あいつが去ると部屋が広くなり、寒くなったように感じる。やれやれと、苦笑いして俺は杖を持つと、コップとチーズを乗せていた皿を片付けることにした。

あの師匠の息子が相手だ。これからきつと忙しくなるのだろう。
静かな日々はもう残りわずかかもしれない。

閑話2 クルスの祭りの前（15話）

収穫祭を明日に控えたその日の朝、私はベッドと服の収納箱しかない狭い部屋でエリーから貰ったフリルの付いたワンピースを両手で抱えながら、この服を着るべきかどうか悩んでいた。

彼女には悪いけどこんな可愛い服は自分には似合わないと思う。

こんなの着て隣を歩いたらケイトが恥ずかしくないかな？ 迷惑じゃないかな？

そんな不安にかられる。

「むー……」

エリーは私にとって姉のような人だけでも、彼女の考えは未だによくわからない。

服を着ると何か変わるの？ とエリーに聞くと彼女は笑って、

「ケイトと一緒に祭りを廻り易くなるよ？」

とか、

「弟はあれでもてるからねー。大人っぽいし？ 何時も通りの格好だったらクルスちゃんじゃなくて、他の子が先に一緒に廻っちゃうかも？」

と、にやにや笑いながら言っていた……エリーは本当に意地悪だ。

だけど、彼女の言いたいこともわかる。まだ少し早いけど、もう少し大きくなればみんな恋人とかを気にするようになる。そしたら……ケイトも……私みたいなよりも可愛い子と恋人になるかもしれない。

そんなケイトが他の人と笑い合いながら祭りを二人で楽しんでいるところを想像する。

……わからないけど、何か嫌だ。

不快な気分になって眉をひそめる。そして、自分がケイトと二人で綺麗な服を着て歩いているところを想像する……。

「クルス」。朝食できたよ？」

「うん」

急にお母さんの声がして考えるのを途中でやめると、私は寝間着から着慣れた動きやすい服に着替えて部屋から出た。今日は収穫祭の準備のお陰で一日狩り。

頑張ろう。と、ちょっとだけ幸せな気分で頷いた。

この日の狩りは幸い上手くいった。

長時間の狩りは少し疲れたけど。体力のあるマイスはともかく、ヘインなんて今にも倒れそう。大人との話し合いはケイトがやってくれるらしく、マイス達は先に帰ってしまった。

「……はい。この班にはこれだけ……」

「ああ、そんじゃ足りない……」

「大丈夫です。その分……」

「そういうことか。わかつたいいぜ。任せろ」

私は残ってケイトと大人のやり取りを見つめる。真剣な表情で私にはわからない話をしていた。昔から不思議……何故ケイトはこんなことが出来るのだろう。

誰もケイトを子供扱いしていない。

それでいてそれが自然なように見える。

（私みたいな子供と祭りを廻るのは嫌じゃないのかな？）

そんな風にも考えながらしばらく彼の仕事を見ていたがふと、

（私が大人みたいになればいいのかな？）

と、思いついた……これは名案かもしれない。

そうすれば自然に一緒にいれるし、ケイトも楽しいはず。うん、これだ。

（でも、大人ってどうやればなれるんだろう）

首を傾げながら身近な大人を思い出してみる。

ガイおじさん……いや、お義父さんとお母さん……緊張しながらお義父さんは手を繋いでた。ぶるぶる震えて、ずつと躊躇してただけなんでだろう。後は……抱きしめるのと……キス？

特別難しい技術はいらないし、組手でヘインを倒すより簡単な気がする。

まずは手を繋ぐことからかな。

「クルス。終わったよ？ 待っててくれてありがとう」

「うん、お疲れ様」

私は地面に置いていた荷物を持つと、いつもより少しだけケイトの近くに並んで歩くことにした。

まずは手を繋ぐ……繋ぐ……こと。

簡単なことのはずなのになかなかケイトの手をとることが出来ない。手を繋ごうとして急に湧き上がる不安……変だと思われたら……

…嫌がったらどうしよう……。

そう思うと急に怖くなって手を引つ込めてしまう。

表情には出さないように気を付けながら、隣を歩きつつも焦りを感じ始めていた。

（そうだ、剣術でも基本が大事。急には出来ないから一步ずつ……
まずは、触るところから）

名案だと思う。さりげなく触るだけなら不自然じゃないはずだし。前を向きながら、手を宙にふらふら彷徨わせてみた。そうすると、自分の手の甲がたまにケイトの手の甲に触れる。何故か顔に血が上り、緊張で心臓がときどきと鳴っているが、まずは第一目標達成。しばらくそんな風に歩き、大分慣れてきて甲と甲が触れるのは大丈夫になった。

（次は……手を繋ぐ！）

なんとか自信も付き、背中に汗を感じながらも手を繋ぐと覚悟を決めて力を込めたその時、

「なにあれ」

前を向いて歩いていたのは失敗だったかもしれない。ミスが男達に囲まれているのを見て、思わず足を止めてしまい声に出してしまった。

「さてどうするかな」

「様子見」

もう少しだったのと思うと、どうしても不機嫌な声になってしまふ。

マイルスには今度身体で責任を取ってもらおうと思う。

家に戻って夕食を食べ、桶に入れた水を使って身体を丁寧に拭いてベッドに座る。手元にはエリーが作ってくれた新しい服がある。今年も着ないでおこうと思っていたのだけれど……。

「どっしよ」

思わず口に出してしまった。慌ててドアの方を見て誰もいないのを確認し、ほっと息を吐く。

結局、マイルスが助けた女の子のお陰でケイトと踊りの約束をすることが出来た。だから、マイルスは許すことにする。問題は……明日。

約束はしたけど、エリーの何時も通りだと外の人に誘われて踊ってしまいかも……という言葉が頭から離れない。立ち上がり、手元の服を体に合わせてみる。

例えばこんな服を着た自分以外の人がケイトと踊っている姿を想像する。

……絶対嫌だ。

そんなのを見たら強引に取り戻そうとしてしまうかもしれない。でも、普通の女の子に暴力を振るうわけにもいかない。嫌われるし、困ったことになってしまう。

なら、どうすればいいのか。

去年のように誰も近づけないようにケイトを見つけて見張っておけばいい。

だけどそれだと、ケイトが楽しめない。それも困る。

ぐるぐると悩んでしまつて答えがでなくなり、ふと、お母さんに聞いてみようと思いついた。大人っ婆ければケイトは楽しめる。したら、一緒にいても問題はない。

思い付くと服を持ってまだ食堂で洗い物をしていた母のところに、行つて聞いてみた。

「これ」

「あら、今年のお祭りの服なのね？ エリーにまたお礼を言つておかないと」

「……大人っ婆い？」

お母さんは少し考えていたけど、

「大人っ婆いし素敵よ？ それを着たらどんな男の子でも喜ぶわ」

と、くすくす笑つた。

どうやらケイトも喜んでくれるらしい。動きにくいし恥ずかしい

けどそれなら問題無い。私は一つ頷くと、お母さんに言った。

「明日これ着る」

自分の部屋に戻ると服を丁寧に置き、ベッドにぼすつと音を立てて倒れ込む。

随分と悩んだけど、これでいい……何だかこんな感じで同じように悩んだ事があったような……気のせいかな。心がぼかぼかする感じで嫌じゃないし、あっても悪いことじゃなかったのかも。

この服を着れば今日出来なかったこともちゃんと出来るかもしれない。この服を着て、ケイトと二人で楽しんでいる自分を想像するとなんだか幸せそうに思えた。

……明日が楽しみ。

閑話 3 ヘインの憂鬱（18話）

暖かかった春が終わると、今年はすぐに真夏かと思わせる程に暑くなった。毎年、春の終わりには雨がまとまって降るのだが、今年はそれもなく唐突に夏がきたのかと思わせられる。書庫はこの家ではまだ風がよく入る涼しい場所にあるのだが、それでも本を捲る指に汗が滲んでしまうのが煩わしい。

そんな暑さを恨めしく思いながら、僕は自分の観察が役に立つかもしれないことを喜んでいいのか嘆けばいいのか悩んでいた。

僕は知っている薬草に関しては、毎年の生育について種類ごとに細かく日記らしきものをつけており、例年と全く違う薬草の生え方と育ち方から今年は異常気象になるのではないかと疑っていた。

もし、本当にそうなるならばすごい発見ではないだろうか。異常気象などならないほうがいいのは間違いないが。

最もこの話をしたのは師匠の一人であるジンさんにだけだ。不吉な予想など誰も喜ばないのだから……彼なら疑いつつも調べ、村のために対策を考えてくれるだろう。そうなれば、後は大人達の仕事だ。

ジンさんは頼りになる師匠であり、このような点では尊敬している。しかし……、

「ヘイン君、難しい顔して……まだ調べ物？」

「う！ あ、ああ。そうなんだ。エリーさん」

後ろからひょいっと顔を近づけられて耳元で明るい声で急に呼びかけられると、一瞬で顔に血が上り、飛び上がりそうになった。

気が付くと、後ろにいつのまにか友人のケイトの姉であるエリーさんが二人分のハーブティを用意して立っている。

ケイトの姉である彼女は、顔立ちこそ似ているが真面目でどちらかというと口数も少ない落ち着いた弟と違って、底抜けに明るく元気で、話好きで相手まで明るくしてしまうような性格の魅力的な女性だ。

二人分のお茶……今日はジンさんは村を回って診察しているためにいない。出かけるときにジンさんは僕に遅くなると行って出かけて行ったのだが……彼の狙いはなんとなく透けて見えている。

「そろそろ一度休憩にしましょ？」

「ああ、もう結構時間経ったのか。時間が経つのは早い」

窓から外を見ると、昼に彼女の手料理を頂いてからそこその時間間が立っているようだった。集中したせいか、太陽の光が目に入ると少し痛い。

僕は彼女の方を向き直して有り難い申し出に頷くと本を読む手を止めて、彼女の後ろについてテーブルのある部屋へと歩いていった。

テーブルを挟んで僕とエリーさんは向き合う。彼女は僕ととりと

めもない話をしながらにこにこしている。僕は話が苦手だ……他の女性は誰もが敬遠する僕の面白いと言えない話でも本気で笑ってくれるのは本当に有り難い。

はつきりいつて僕は彼女のことが好きだ。

僕と話すときに驚いたり笑ったりコロコロ変わる表情も、困っているときは見逃さない鋭さも、氣遣いの出来る優しさも、可愛らしい唇も……だけど、彼女は僕に友人としての好意は持ってくれているものの、僕に対して恋愛感情は持っていない。これは断言できる。

なぜなら彼女には好きな人がいるからだ。

心の中で一つ溜息を吐く。その彼女の好きな相手は恐らく僕と彼女をくっ付けようというらない気を使っている。そして、僕はそのせいで余計にどれだけ彼女が彼を愛しているか……そう、もう恋ではない。

愛しているのかを聞かされるのだ。

さらに厄介なことにその時間でさえ楽しいので更に好きになってしまふ悪循環。

おそらく彼女は無意識なのだろうが、僕としては彼女と二人でいる時間は嬉しいが痛いという微妙な時間なのである。嬉しい気持ちのほうが強いのがまた辛い。

「……？　ヘイン君どうかした？」

「あ、いやなんでも。ちょっと考え事が」

ぼーっとしていたようだ。慌てて手を振る。

「なにになに！　悩み事なら相談乗るよ？　友達だもの！」

友達……年少のいたずらっ子のように笑う彼女には悪意はない。苦笑しながら、何か悩み事あったっけか……と記憶を探ると、一つ最近おかしいことがあったので彼女に意見を聞いてみる事にした。

「最近、ケイトは変だと思いませんか？」

ことつ……と、木製のコップをテーブルに置き、彼女の方を見ると少し考えるような仕草をした後、頷いた。

「そうね。秋くらいから少しおかしいかも。クルスちゃんを避ける？」

「はい。理由は知りませんが」

避けてるのは解る。問題はその避けている理由だ。クルスに変わったところはないし、特別ケイトが何かをされたわけでもないだろう。多分。

無口で能動的でもない彼女が普通の女の子っぽく恋人になるように迫るのとかは全く想像が出来ない。

「クルスちゃんは……うちの弟の事が好きだよね？」

「まあ、多分」

「じゃあ、好きな人に興味無いつて態度とられるのは辛いよね」

むうと可愛らしく唸る。全くもってその通りだ。本当にこの姉弟は……。

半分飽きれつつ見ていると、エリーさんはそうだ！ とぼんと手を叩いた。

「ヘイン君、弟に原因を聞いてよ！ 私はクルスちゃんに聞くからさ？」

「構わないけど……男女の問題は自分達で解決するしかないのでは？」

正直、男女関係に関わるのはごめんだ。だが、彼女は、

「それは違うよヘイン君！ 確かに最後は自分達で解決しなきゃいけない。けど、もし悩んでるなら年上として、ちゃんと相談に乗ってあげないと！ 自分たちの力で解決するための手助けは必要だよ？ それにやっぱり心配だし……」

勢い良く立ち上がって言いながら最後は不安そうに呟きながら椅子に座る。僕は溜息を吐くと関わる覚悟を決めた。彼女に不安そうな顔はさせたままでいたくない。

自分は馬鹿だなと正直思うが、彼女にはやっぱり笑顔が良く似合

うのだ。そのためには僕はなんだってしてあげたいのである。それが今の自分の幸せなのだから。

「わかりました。ちゃんと僕がケイトにアドバイスしておきます。いい案もありますし、すぐに解決しますよ」

「ほんとっ？ 流石ヘイン君ね。賢いと違うねー。お礼に今度私の友達紹介するね？」

「それはいいから」

苦笑いする僕に彼女はほんとお堅いんだからーっとくすくす笑っていた。

堅い訳ではなく、彼女にしか興味がないだけだ。と、本人に言えたらどれだけいいだろう。

この後の小さなお茶会は穏やかな雰囲気ですることができた。僕にとっては一番大切な時間である……けど、こんな時間もあと何回あるのだろうか。

彼女はきつと目標を達成する。僕にとっては辛いことだけど、彼女の幸せがそこにあるなら祝福しようと思う。あの人も流石に彼女を不幸にすることはないだろうし。

それなら、彼女が迷わないように、僕のことは友人として良い思い出になるように……気付かれる前に僕は彼女の前からいなくなると思う。勿論、それは彼女の為だけでなく、僕自身の夢を叶える為でもあるのだけど。

僕に例え自分のことを好きでなくても力づくで振り向かせて、奪

い取るくらいの気概があればまた違ったのだろうか。将来……情けなさに後悔する日が来るかもしれない。

だが、それも自分で選んだ未来だ。

どんな手を使ってでも好きな女性を奪った未来に幸せを思い描けなかった自分に資格はないのだ。そう、思った。

小一時間程話をした後、僕は借りていく本を選び、家に帰る準備をしていると師匠であるジンさんが丁度家に戻ってきていた。家に戻る前に挨拶をしておかなければと、調合を行う部屋へと足を運ぶ。彼は戻って休む間もなく、薬草の葉を擦り潰していた。

「ジンさん、お疲れ様です……何もこんな時間になるまで回らなくてもよかったのでは？」

「ああ。だが、身体の動かない人もいるからな。俺もここにずっといては身体が錆びるし、まあ、ついだという奴だ」

ジンさんは足が片方悪いため歩くには杖がいるし、それを持っても歩きにくい。だから村人は基本的にはこちらまで歩いてくる。病氣の人には自身で行かざるをえないが、薬だけであれば家族に取りに来てもらっている。

だが、今日の場合はそこまでの必要がある人は2、3人だけだった。午前中だけでも十分終わる人数だったろうし普段はそうしているはずだ。

彼は一度手を止めると、身体を調合台からこちらに向けると、僕の顔をみてうつすらと笑う。

「それに、若い者同士が語らうの邪魔するのも無粋だろう」

「僕達は多分そういう関係にはなりませんよ」

頭が痛くなる。少しこめかみを抑えながら、僕は血を吐く思いで言った。だが、師匠にはそんな思いは伝わっていないようだ。

「お前なら大丈夫だ。頑張れ」

「手遅れですよ。どう考えても無理です」

ジンさんは僕の気持ちに気付いているだろう。そして、エリーさんの気持ちもわかっている。そちらはどうも軽く見ているようだが……苦笑いする僕にジンさんは若いから大丈夫だと見当外れなことを言っていた。

僕はジンさんは頼りになる師匠であり尊敬している……が、男女関係に関してはどうしようもなく駄目な人だと思っているし、殴りたいと思って僕が悪くないと思うのだがどうだろうか。誰かに一度聞いてみたい。

閑話 4 相談その後（二十三話）

マイスから報告を聞いたお義父さんは、ケイトのお父さんのモルト村長との相談に向かっていた。
そこから家に帰ってくると疲れたのか珍しく難しい顔をして、椅子に座っている。

「どう？」

「ああ……いや」

水と夕食を私とお母さんで三人分用意し、お義父さんの対面に座る。

私に問いかけに対してお義父さんの反応は鈍い。

そんな様子にお母さんも心配したように声をかける。

「ガイ……何があったの？」

「ああ。ちよいと放置するとやべーもんがな。戦わなければならない
くなった」

お義父さんはパンを少しだけちぎって口に入れる。

昔、結婚する前は狩りのときとか豪快に食べていたけどお母さんと結婚して行儀がよくなった。

ぎこちないけど、いつもはそれでも幸せそうにしている……しか

し、今日は流石に真剣だ。

「危ないの？」

「クルス……今回は……危険すぎる。お前もケイトも置いていく」

苦々しくそういつて、お義父さんは苦いものを流すように水を軽く飲んだ。

「ガイ。貴方は……大丈夫なの？」

「心配すんな。俺ならいける……それに、マリアさんも手伝ってくれる」

「マリア……ケイトのお母さん？」

戦うときには出てこなさそうな名前に不思議に思って問い返す。
お義父さんは頷き、

「あの人は俺よりも強いからな」

「え……」

かわいい服を作っては私を着せ替えて遊んだり、お菓子を焼いたり、いつもいつもにこにこしてるしで家庭的なイメージしかないから驚いた。

流石ケイトのお母さん。

「それでどうするの？」

「ケイトがいい案を出してくれた。それをジンと相談して決める」

「なら、ケイトは絶対に参加するね」

「んぐっ」

何年も見ているからわかる。

ケイトは自分で出来ない事を提案なんてしない。

彼は自分ができる範囲のことをする人だから。

それなら私の取る道は決まっている。

彼を守るために……一緒にいるために……。

「私も行く」

「だ、駄目だ駄目だ！！危ない！！」

反対されるのはわかっている。

お義父さんが私を心配してくれるのも嬉しい。
だけど、

「駄目でもついていく」

「クルス……危ないのよ？クルスにもしなにかあったら……」

不安そうにお母さんの視線が揺らぐ。

愛している人を失った辛さは私には解らない。

だけど、

「ケイトが死んだら私も死ぬ」

「おい、馬鹿なことをいうなっ!!」

だん!とテーブルをお義父さんが叩いた。
だけどこれは本当のこと。

体は大丈夫でも心はまた死んでしまう……そんな気がする。

「そう決めた。だから私がケイトを死なせない」

「勘弁してくれよ……とにかく駄目だ」

お義父さんが泣きそうな顔をする。

申し訳ないけどこればかりは譲れない。

二度も命と心を助けられたこともあるし……それに、

「ケイトが好きだから……死なせたくない」

「クルス……」

「駄目だからな。絶対だめだぞ!」

お母さんが、泣きそうな困ったような顔をする。

私はお母さんのように後悔で泣いて暮らしたくはない。
怒った顔でこちらを見ているお義父さんを見つめる。

「駄目だ！子供には危険すぎる！」

「大人も一緒。森に慣れてないから余計に危険」

ぐっとお義父さんが息を詰める。

「お、女は全員認めてないんだ！」

「私はミスにも勝てる」

「あのなあ！ありや練習だろうが！！」

しかし、勝ってるのは事実だ。

命懸けになればどちらが勝つかはわからないが。
ケイトを守るためなら絶対に勝てる。

お義父さんが黙ってしまったためそのまま睨み合う。

「……だああああ！わかったよ。だけど条件がある！」
「条件？」

30分程で根負けしたようにお義父さんは叫ぶ。

「ああ。まずは一番危険な場所は駄目だ。これはケイトも絶対にだ」

こくりと頷く。

ケイトがいらないなら、そこに固執はしない。

「でかいゴブリン…… ノーブルゴブリンが来たら…… 絶対に無理をするな。出来れば逃げろ」

「ノーブルゴブリン？」

水の入ったコップを弄りながらお義父さんは頷く。

「ゴブリンの上位種だな。冒険者時代に戦ったことがある。強敵だった」

「お義父さんは勝てた？」

「ジンと二人でな。ケイトの話から推測すると恐らくいる」

そこまで話すとお義父さんは一度立ち上がり、物置の方へと歩いていった。

部屋にお母さんと二人きりになる。

私は、心配そうに見ているお母さんの方を見た。

お母さんのお腹は少し膨らんでいる。

あまり心配はかけたくないのだけど……。

「お母さん、我儉言ってごめん」

「大事なのね…… ケイト君が」

私は頷く。

「ケイトは頭いいし大人っぽいけど怖がり寂しがり屋だから」

「そうなの？」

「そう。だけどそこも好き」

不思議そうな顔をしたお母さんにそう続けると、理解してくれたかのように微笑んでくれた。

解ってくれたら私も嬉しい。

「あなたの好きはどういう意味の好きなのかしらね……」

「……？」

お母さんはよく意味のわからないことを言った。
好きなのに種類があるのだろうか。

しばらくして、お義父さんは無骨なデザインの大きなナイフを持つて戻ってきた。

「これ持つてけ。クルスなら使える」

「これは？」

「友人の形見だ。女好きのどうしようもないやつだったが、いいやつだった。あいつもクルスが使えたら喜ぶだろ」

友人を思い出しているのか苦笑いして、その幅のあるナイフを鞘ごと私に渡す。

自分でも手に持ってみる。

何故かぴつたりと私の手に馴染んだ。

「まあゴブリンだけなら、木刀で十分だろうけどな」

「ありがとうお義父さん」

「感謝なら死んだハザードにいつといてくれ」

言われたとおりにお義父さんの友人に目を瞑って祈りを捧げておく。

ケイトを守ってくれるようにと。

女好きらしいから嫌っていかもしれない。

「しかしどうしてこう、お転婆娘になっちまったかなあ」

「お義父さんのお陰」

苦笑するお義父さんにきっぱりと告げる。

「感謝してる。ケイトに出会わせてくれたことに」

「俺はちよつとばかり後悔してるぜ……まったくあの野郎……」

「他の人ならいいの？」

「そうだなあ……ダメだな。情けない男には嫁にはだせん！」

お義父さんにとってケイトの存在は複雑なんだろう。
少し可笑しくてくすくすと笑ってしまった。

「ガイ……貴方親馬鹿になってるわよ。もう……」

お母さんもお義父さんのあんまりな言いようにくすつと笑っていた。

「さあ、食べましょ。いろいろ心配もあると思うけど、まずは元気出していかなきゃね」

「ああ、そうだな。辛気臭い顔はしておられん」

お義父さんは慌てたように緊張でしまった顔をマッサージするかのようにぐにぐにと触る。

「ガイは明るくなくっちゃ。皆それを期待してるし、私は……まあ全部好きだけどね」

「お、おい……」

そんなお母さんの言葉に真っ赤になる。

いい加減慣れればいいのに……と思いつつ、私とケイトもこんな風になればなーとふと思う。

雰囲気も軽くなり、私たちは食事を再開した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6474s/>

地味な青年の異世界転生記 閑話

2011年4月26日07時44分発行